



よもやま話に花が咲く。えきんぐらがお届けする小ネタ袋。

蔵通信 三八号

2014.5

発行：絵金蔵運営委員会
発行日：2014年5月1日
〒781-5310
高知県香南市赤岡町538
Tel.Fax 0887-57-7117
ekingura@mx.netwave.or.jp
http://www.ekingura.com/

第三十七話 敗者たちのドラマ

シリーズ
絵金蔵
百話



INFORMATION

今年も発行しました。

『土佐芝居絵のある祭礼 案内手帖 2014』



土佐芝居絵屏風を飾る夏祭りのガイドブック、『土佐芝居絵のある祭礼 案内手帖』2014年度版を発行しました。今回は写真がカラーとなり、読み物としてもお楽しみいただけます。絵金蔵にて無料配布中、ぜひご活用ください。

あかおかの
まちづくり活動から
生まれました。



犬も歩けば赤岡町
1,200円(税込)

普通のまちを楽しむヒントがいっぱい。思わずクスッと笑ってしまう、路上観察の記録が、本やレトロなポスターに。赤岡のまちづくりは現在、絵金蔵でお客様に貸し出している「町歩きカルタ」にもつながっています。



ポスター 42×59.5cm
500円(税込)



いずれも絵金蔵にて
好評発売中です。

EKINGURA
one-year
passport



1年間何度でも入館可能、
その他、さまざまな特典あり。詳しくは絵金蔵HPをご覧ください。

お得な年間パスポート
販売中です。

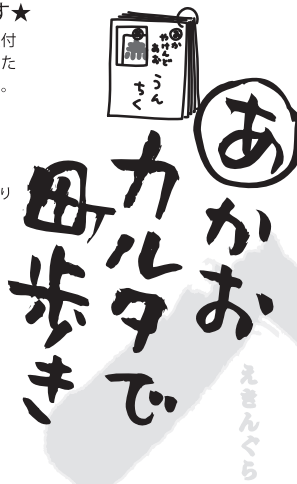
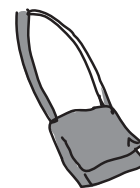
まちの素敵を探して、歩いて。

★町歩きカバンをお貸しします★

参加方法 絵金蔵受付にて参加受付。受付にて町歩きセット一式が入ったカバンをお受け取りください。
※ 荷物預りあり(無料)

受付時間 午前9時～午後3時半
(絵金蔵開館中)
午後4時半までに絵金蔵にお戻りください

参加料 300円(ラムネ代込み)
お問い合わせ 絵金蔵 TEL.0887-57-7117
※ 団体の場合は要予約

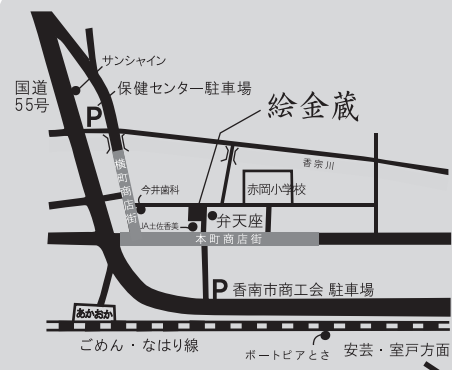


【絵金蔵】

開館時間
午前9時～午後5時
(入館は午後4時半まで)

観覧料
大人500円、高校生300円
小・中学生150円
(15名以上の団体は各50円引き)

休館日
毎週月曜日
(月曜が祝日の場合は火曜)
12月29日～1月3日



幕末土佐の芝居絵師・金蔵(通称・絵金)。彼は土佐各地の祭礼に多くの芝居絵屏風を残しました。絵金蔵は、平成17年2月、赤岡の地に残る23点の芝居絵屏風を収蔵・保存するために作られた施設です。

絵金蔵の三つの使命

：年に一度
絵金の文化を
守るため
：伝承
次の世代へ
伝えるため
：縁結び
地域を超えて
世代を超えて



絵金屏風が
紹介されました。

夜長堂の乙女モダン蒐集帖



大正・昭和時代の着物の柄などを復刻させ、オリジナルの紙ものの雑貨を展開する夜長堂の新刊。店主・井上タツ子氏により、絵金や絵金祭りがレトロで少し妖しいモノたちと共に紹介されています。

発行：パイ インターナショナル
2014年5月12日発行
販売：TSUTAYA、紀伊国屋書店、amazon ほか
価格：1,600円（税抜）
HP：http://www.yonagadou.com/

月刊 大和路ならら 2014.7月号



日本フリーペーパー大賞の最優秀賞を受賞した奈良県の地域情報誌『ならら』。大和文華館館長・浅野秀剛氏による「大和と浮世絵」第72景で、芝居絵屏風「花衣いろは縁起 鷺の段」が紹介されています。

発行：地位情報ネットワーク株式会社
2014年7月1日発行
販売：下記をご参照下さい
http://www.narara.co.jp/sub/toriatukai.html
価格：500円（税抜）

ニッポンの奇天烈な絵画



既存の日本絵画の枠組みからはみ出してしまった“奇天烈”な絵画を、さまざまな切り口で紹介。これまで日本絵画になじみのなかった方にも分かりやすい一冊です。芝居絵屏風「浮世柄比翼稲妻 鈴ヶ森」掲載。

発行：株式会社 総合図書
2014年8月1日発行
販売：TSUTAYA、紀伊国屋書店、amazon ほか
価格：1,600円（税抜）

ぜひ、ご覧下さいませ！



絵金百話

第三十七話 敗者たちのドラマ

ひらかな^{せいすいき}盛衰記 逆櫓^{さかろ}

< 概要 >

『ひらかな盛衰記』は、時代物の人形浄瑠璃として元文4年（1739）大阪・竹本座にて初演されました。作者は文耕堂・三好松洛・浅田可啓・竹田小出雲・千前軒、5人による合作です。この外題は『源平盛衰記』を平仮名のように分かりやすくした、という意味で、源平合戦中、源義経の木曾義仲討伐から一の谷合戦までが背景となっています。

「逆櫓」とは、船首と船尾両方に櫓をつけ、前後に船を操る技術のこと、三段目ではこの逆櫓の秘訣を受け継ぐ摂津福島（現、大阪市福島区）の船頭・権四郎一家が、その技術を持ったがゆえに源平の争いに巻き込まれていく様が描かれます。権四郎は巡礼中、大津の宿で、孫の槌松を相部屋となった武家の子と取り違えられますが、その子の面倒を見ていればいつか槌松も戻ってくるだろうと、我が子同様に大切に育てていました。ところが、思いがけず槌松が惨殺されたこと、さらに信頼して逆櫓の技を教えた婿・松右衛門が、実は義経への復讐をねらう木曾義仲の家臣・樋口次郎だったことを知ることとなるのでした。

今回ご紹介する芝居絵屏風は、今日も歌舞伎や人形浄瑠璃で上演される三段目後半の見せ場「松右衛門内」「逆櫓」の両場面を描いています。樋口次郎の名乗りを中心に、場面展開や登場人物の性格など、芝居をよく解する絵金派絵師による作品です。かつて香美市土佐山田町・八王子宮の夏祭りの際、商店街に飾られていました。

今回も、どうぞお楽しみ下さい。

樋口次郎兼光 —鎮魂のドラマ—

太刀取直し、我と我首えいえいと
掻き落とす、忠義の最期ぞ潔き。

ひらかな盛衰記

英雄としてよみがえった樋口、当時の人々の敗者に対する眼差し、鎮魂の想いは、文学や演劇を通じ今に伝えられています。

今回の物語の主人公、樋口次郎兼光（？ー一八四）は歴史上実在した平安末期の武将で、木曾義仲四天王の一人と言われ、幼い頃から義仲と共に育った股肱の臣でした。『平家物語』や『源平盛衰記』によると樋口は軍の中心人物であったにも関わらず、主君と運命を共にすることができず、義経に降伏し、義仲の首が都大路を渡される際にはその後について引き廻され都人のはずかしめを受けたといいます。

ところが『ひらかな盛衰記』に登場する樋口は義仲の死を知った後、秘かに逆櫓の技術を習得して義経・範頼への復讐を企てます。五段目では義経に「樋口が命は助くべし」と温情をかけられますが、残された駒若丸の行く末を託し、自らは我首を切り落として壮絶な最期を遂げるのです。

兼光、死を逃れて降人となり、
大路を渡され面を曝す。その心勇
士にはあらざりけり。皆人恥かし
めあへけり。

源平盛衰記

参考
松崎仁『ひらかな盛衰記』管見—三段目に関する二、三の問題—『日本文学研究』30号 1995年1月
黒石陽子『ひらかな盛衰記』論—勇士としての救済と鎮魂—『近松以後の人形浄瑠璃』（岩田書院 2007年2月）所収

着物が表す役柄

歌舞伎や人形浄瑠璃などの衣裳は基本的に劇の内容や演出を助ける役割を持つもの。屏風絵の『ひらかな盛衰記』に登場する樋口次郎の着物は大胆な格子柄ですが、現行の歌舞伎でも樋口の役は弁慶格子と呼ばれる縦横とも同じ幅の格子柄を着ています。



『義経千本桜 鮎屋』権太
香南市赤岡町本町四区所蔵

『妹背山婦女庭訓 御殿』蟻七
高知市郡頭神社奉納保存会所蔵

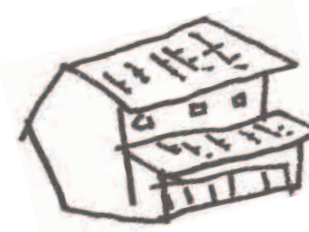
参考 『歌舞伎登場人物事典』白水社 2006年5月



『ひらかな盛衰記』樋口次郎

昔赤岡と今赤岡

part IV 「ハイカラ古民家」編



赤岡町商店街のメイン通り、本町一区には、レンガ塀が目にも鮮やかな、ひととき目立つ大きな古民家があります。ここは初代赤岡村長となった小松与右衛門が建てた邸宅で、造り酒屋やレンガの製造・販売が行われていました。町と共に歴史を刻んできた民家の一つをご紹介します。



大正末期からの歴史

大正末期、宗石家が新たにこの家に入居しました。当時の価格で120円だったといえます。宗石家は靴屋を始め、洋服やたばこも扱いました。靴の木型や販売価格表、道具類が今もほとんど残されています。



外観。店部分の一部改造はあるものの、母屋全体は幕末頃と見られる建築当初と大きく変わっていません。



正面から裏庭に続くレンガ敷きの通路



外堀に設けられた裏口

屋内は、土間をはじめ、土足の空間は全てレンガ。店、酒樽やレンガ置き場などの空間により、レンガの敷き方を変えています。



ちなみに…



町内には、お宮の境内や堀の半分だけ(?)など、変わった使い方をしたレンガがあちこちにありま

上の漆喰のところに紅く塗ってあるのはベンガラだと思んですが、一般的には遊郭とか遊び場でよくやる手法なんですけれども…普通のお宅にあるので、ちょっと珍しい。

…戦後になると、いろんな色つきのタイルだったり、装飾タイルが安く出るようになったんで、そういうものを貼ってあるのが主流なんですよ。真っ白だけのこんなにスッキリしたものっていうのは古いということと非常に貴重なお宅じゃないかな。

(林丈二氏コメントより)

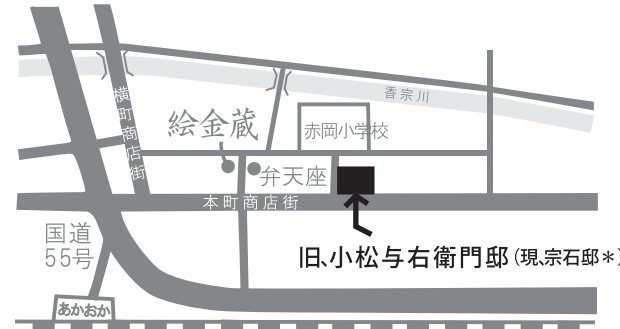
『犬も歩けば赤岡町』赤岡町町のホメ残し隊 2001年11月

小松与右衛門

弘化2年(1845)、赤岡生まれ。家は貧しい酒の小売商で、着たきりの着物に、道端に捨てられたワラ草履を片方ずつ拾って履いていたというエピソードが伝えられています。その後、赤岡一の造り酒屋・寺尾酒造に丁稚に入り、23歳で独立、酒造業で成功。昼間は仕事、夜は自ら町の夜警を務めました。地元小学校の設立にも関わり、私財を投じて赤岡の近代化に尽力、明治22年(1889)、初代赤岡村長となりました。現存する邸宅では、酒造とともにレンガの製造も行っており、宗石家が入居した際レンガを焼く窯が残っていたといえます。



参考文献
『土佐の民家—郷愁の民家建築83選』高知新聞社 1997年6月



ごめん・なはり線

*建物内部はご覧いただけません。宗石たばこ店は閉店しました。

榎 四郎の家の門前の老松。源平合戦において、松の下で源義経と梶原景時が逆櫓について論争したというエピソードを元に、重要なモチーフとなった松です。門松の他にも代々船頭一家は松右衛門を名乗り、段の最後にはこの松に登って樋口が辺りを見渡します。

『平家物語』によると、景時は船に逆櫓をつけることを進言しますが、義経は始めから逃げることを考えては縁起が悪い、とそれを退けたと伝えられています。

■ 逆櫓の稽古に事寄せて、搦捕り連来たれ！

約束通り逆櫓の稽古にやってきた梶原方の船頭・又六、富蔵、九郎作の三人が稽古中、樋口に襲い掛かります。しかしそこは名だたる勇猛な男、まずは富蔵の振り上げた櫓を奪って頭を微塵に打ち碎き、あとの二人もまたたく間に頭を踏み碎きます。

■ 親子は新肝取られ、あきれ果てたるばかりなり。

婿の告白にびっくりかえって驚く榎四郎。樋口はじっくりといきさつを話し「此上に私が武士道を立てさせて下されば、生々世々の御厚恩、聞分けてたべ親父殿」と懇願しました。怒り狂っていた榎四郎も、名高い勇士の情理を尽くした言葉に「舟玉冥利…悔みもせぬ、泣きもせぬ」とついに心を開いたのです。

■ 榎四郎、頭が高い！

障子の奥から刀を差して現れる、松右衛門に身をやつした樋口次郎。

「其子死人づたづたに切り刻んで女に渡せ。」という榎四郎に、いよいよ正体を明かします。



物語る小道具 ～仙壇～

この日はちょうど、およしの前夫の三年の祥月命日。近所のおかみさん連中にも声をかけ、お茶を出して回向していたところでした。

■ ヤアこな様は…

主人・義仲の家臣として見知った樋口が突然現れ、驚くお筆。樋口から駒若丸を渡され、その高い身分を示すよう、大事に掲げています。

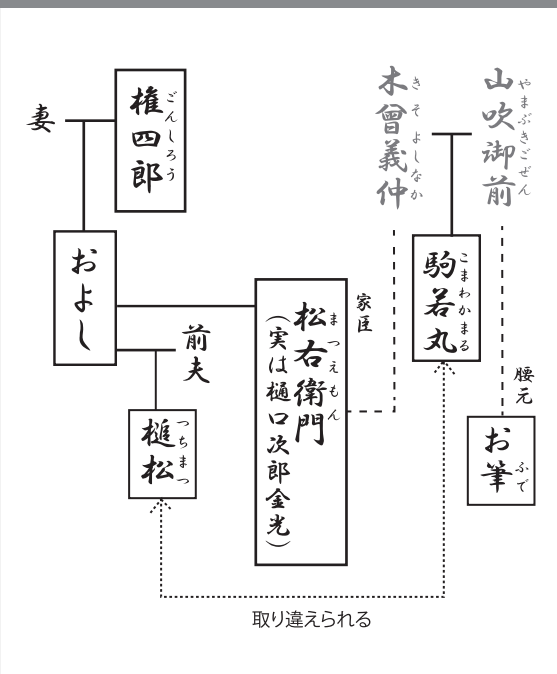
物語る小道具 ～大津絵～

滋賀県大津市で江戸初期から描かれる民俗画。東海道を行く旅人たちの土産・護符として知られていました。榎松の形見となった大津絵を見ながら、榎四郎が嘆きます。

「コレ此襖を見やれ、かはいや榎松が…持って歩いて嬉しがった鬼念仏に餓鬼、外法殿の頭へ様子さいて月代剃る*…戻りをつて見をつたら、さぞ悦ばうと張つて置いて待つたに…」

*「鬼念仏に餓鬼」「外法殿の頭へ梯子さいて月代剃る」とは、いずれも大津絵十種にも選ばれる代表的な絵柄。

ひらかな盛衰記 逆櫓 主要登場人物



天地に轟く鳴る雷の如く
お姿は見ずとも定めて音にも聞きつらん、
是こそ朝日将軍義仲公の御公達駒若君。



【参考文献】

『浄瑠璃名作集 下』有明堂文庫 大正15年9月 有明堂書店
『歌舞伎事典』平凡社 1993年4月
『歌舞伎登場人物事典』白水社 2006年5月

『絵金 極彩の闇』grambooks 2012年10月
『絵金 土佐の芝居絵と絵師金蔵』高知県立美術館 1996年
『ほうおう』390号 2010年11月 松竹株式会社
『国立文楽劇場 第129回 文楽公演 平成25年1月』国立文楽劇場



ひらかな盛衰記 逆櫓

二曲一隻屏風/紙本着色/152.0×185.0cm
香美市・土佐山田町西本町三丁目町内会 所蔵

— あらすじ —

摂津に住む船頭・榎四郎の婿・松右衛門は代々伝わる逆櫓の技術のおかげで源義経の平家攻めの船頭に取り立てられることになる。報告を聞いた榎四郎と妻・およしが喜んでいところへ、木曾義仲の正室・山吹御前に仕えた腰元・お筆が訪ねてくる。実は一家は巡礼中、大津の宿でおよしと前夫の子・榎松を取り違えられていた。お筆を見た親子がやっ

と我が子、孫に会えると喜んだのもつかの間榎松は殺されたと知らされる。

嘆く榎四郎たちに、お筆は帰らぬ榎松を諦めて、こちらの子を返して欲しいと頼む。榎四郎はその言葉に、他人の子ならなおさらと大事に育ててきたものを、いっそ殺して返そうかと怒り狂う。そこへ、奥で休んでいた松右衛門が現れ、実は自分は義仲の家臣・樋口次郎兼光、取り違えられた子は主君義仲の遺児・駒若丸であると名乗りを上げた。

樋口は狙い通り、主君亡き後の復讐のため逆櫓の稽古をはじめようとする。しかし、船頭を命じた義経側の梶原景時は素性を見抜いており、梶原方の船頭たちが樋口を捕らえようとするが、返り討ちに遭う。そこへ榎四郎がいち早く樋口を源頼朝の臣、知勇を兼ね備えた畠山重忠に訴える。駒若丸は取り違えられたまま、榎松ということにして、助命してほしいと嘆願された重忠の説得により、樋口は潔く縄目にかかった。